

土製耳飾りの時代

元長野県埋蔵文化財センター調査課長

百瀬長秀 氏

今、ご紹介いただきました百瀬と申します。経歴とかは大体、お話をいただいたんで、改めて自己紹介するほどのこともないのですが、えーと、何から話そうか。(まあ耳飾りだから耳飾りからいくか。)

耳飾りに関しては講演会のようなことを今までに2回、頼まれてやりました。2回とも下伊那なんですよ、これがなぜか。1回目は上郷の考古博物館で耳飾りの企画展をやって、これがその時の図録なんですけど、平成13年ですね。1回、耳飾りの話をしろということで、話をさせていただきました。もう1回が3年くらい前だったかな。下伊那教育会で、学校の先生たちの集まりだったのですが、夏休みの学習会みたいところでちょっと話をしろと言われてまして耳飾りの話をいたしました。なぜか下伊那に縁があって、なぜか耳飾りということで今回が3回目になるわけです。他の地域でこういう話をしたことは全然ないわけですから、もっばら下伊那だな、なぜだろう、ということなんですけれど。

あのう、耳飾りっていうのはですね。縄文時代の話もまずはしなくちゃいけないのですが、耳飾りから先にいくと、縄文時代を通じて色々な身を飾る装身具と呼ばれるような、髪を飾る簪とか、あるいは耳に着ければイヤリングだし、それから腕に巻けば腕輪だし、現代人だってそんな装身具を身につけるわけです。

縄文時代にもその装身具を身につけるわけですが、その装身具というのは現代の感覚とちょっと違うんですね。現代はおしゃれです、明らかにおしゃれです。けれども縄文時代の人々はおしゃれのためとはちょっと言い難いような装身具のつけ方をするんです。その話はこれからだんだんするとして、そういう装身具の研究をしている人っていうのはそんなに大勢はいないんですね。研究テーマとして装身具を選んでいる人っていうのはそんなに大勢はいないんです。まして耳飾りということになりますと、装身具の中では耳飾りは多い方ではあるんですが、やっている人は、研究テーマとして取り上げている人はそんなに多くないんですね。(そんなものだから今、お話しいただけたけれども、) まあ、百瀬ぐらいしかいないから百瀬にやってもらおうということになってしまっているんですね。

私個人は考古学が専門で勉強してきたわけなんですけれども、考古学に目覚めたのは中学に入学したあたりかな。子どもの頃から歴史は好きで、歴史小説のようなものはよく読んでおったのですが、中学へ行ったら、塩尻市立丘中学校っていうんですが、遺跡の上に立っている学校なんですよ。それで校舎を建築するときに発掘調査をいくつかやっているんですね。それは昭和20年代、戦後真っ先にできた中学校の一つですから。それで中庭に竪穴住居の跡が残っていたんです、今はあるかな。今はどうなったか分かりませんが、私が中学生の頃は残っていたんです。竪穴住居の掘り方が残っていて、そこに芝を貼って崩れないようにしてあって、ここは住居の跡ですよと標柱が立って、そんなのが二つか三つあったような記憶があります。中学生ですから庭掃除もあるわけですね。教室の掃除もそうですが庭掃除もあって。庭掃除をすると土器を拾えるんですね。古墳時代後半の集落だったんで、(お茶碗のかけら、)土器のかけら、断片ですけど行くと拾えるんですね。うれしくなってね、それこそ宝物だ。そんなところが契機になって大学まで行って考古学を学ぶことになって、主に関心を持てたのが縄文時代、それも終わり頃ということになるわけです。今日、お話申し上げる土製耳飾りが非常にたくさん使われ、作られたのが縄文時代終わり頃に限定されるものですから、ちょうどそこがうまく重なる時期だったんですね。そんなところが 耳飾りに関わる、縄文時代の終わり頃をやったがために耳飾りとの縁も出来て、今日、話を

するということになってきたということです。

で、前置きはそのくらいにいたしまして、レジュメに沿ってお話ししていきたいと思います。メインになる話は武陵地Ⅱ遺跡、武陵地遺跡Ⅱの方がいいんですか、第Ⅱ地点とかいう言い方がいい。(第Ⅱ地点)、ああ、なるほどね。武陵地Ⅱ遺跡と書いてありますが、武陵地遺跡第Ⅱ地点というふうに、すみません。正確というか正式に言ったらそっちの方がよいみたいなので、そちらで行きたいと思います。

それで、発掘調査は平成12年から13年にかけてだそうでした、発掘された時点では私は現場を見ておりませんので、遺跡の様子と言われてもちょっと分かりかねるところです。ただ、その発掘の結果、大量の遺物が出てまいりまして、その遺物の水洗いをしている時にちょっと寄ってけと言われてました。なんでその時に下伊那に来たかよく覚えていませんけれども、それが平成13年だか14年ぐらいだろうと思うんですが、冬だったような気がします。それで、ものすごい量の遺物があるなというのと、あっ、これ、私の好きな縄文時代の終わりごろの資料ばかりじゃないか、耳飾りもあるぞ土偶もあるぞ、これはちょっと只事ではないぞとその時に思ったわけです。

それで出てきた資料は洗って、土器とか石器とかには仕分けてある。それから耳飾りや土偶は目立つのでそれは拾い出してある。というところで作業はそこまでしか進んでいないので、問題は土器なんですけれども、土器ってというのは時代がよく分かる遺物なんです。時代とともに変化が激しいんです。だから土器を見れば大体の時期が見当がつく。日本の考古学は土器の研究をメインに据えて、年代観を決めてきたところがあるんで、まあ日本に限らないですけどね。考古学は大体、土器が年代の決め手になることが多いんですけれども。

それで土器の整理を、まだしてないもんですから、時代もどのくらいの範囲でどんなっていることが厳密には言えないんですよ。だけれど、まあ一部ね、抜き出されている土器を見る限り、あるいは一緒に出てきた土偶や耳飾りも、実は結構、年代観が分かっているものですから、それらを見る限り、縄文時代の後期から晩期といわれている時代にかけての遺跡であろうということは言えるかと思います。

縄文時代の後期、縄文時代は長いものですからね、1万5000年ぐらいあります。今から1万5000年ぐらい前だから、そこから1万5000年ぐらい前から2500年ぐらい前までってところかな。1万何千年か続くっていう長い時代なわけですね。長い時代なもんですから一括りには出来ない。縄文時代の初めの頃と終わりの頃ではだいぶ様子が違ったりするわけです。ですので土器を基準にして、古いところ、中くらい、新しいっていうふうに分けるわけです、大雑把にね。古いところは、さらに古いところとそれほど古くないところとかっていうふうに分けていって、結局ですね、六つの時期に大きく区切ります。

草創期、早期、前期、中期、後期、晩期とまあ、こういうふうに言うわけなんですけれども。縄文時代の終わりごろってというのは、一番終わりは晩期と呼ばれる時期、その前が後期と呼ばれる時期くらいなんですけれども、その後期が今から4000年ぐらい前から始まり、晩期が終わるのが2500年ぐらい前、その次が弥生の時代だということになるわけです。そういう時間幅の中でどうも武陵地遺跡は営まれていたんだろうなということが、おぼろげながら見当がついているということになります。ですが、これはやはりきちんと整理をして、特に土器の接合をして、どんな土器がどんなふうになっていることが分かかってきたところでやっと正確なことが言えるようになると思います。というわけで、仮に後期、まあまったく仮にということはないですけども、断定はしきれないところが残っている、ひょっとしたら中期だってあるかもしれないという、断定はしきれないところが残っているんですが、まあ、後期や晩期の遺跡であることは間違いなさだろうということなのであります。

縄文時代といきなり言って、みなさんもある程度の知識はお持ちだろうと思いますし、縄文時代がどんな時代かっていう話を延々とやってしまうと武陵地遺跡の話にならないんで、うんと簡単に縄文時代の背景というようなこととお話しさせていただきますと、狩猟・採集・漁業ってというような自然の恵みを当てにした人たちの生活

していた時代である。弥生時代以降は農業をやるようになるんですが、縄文時代というのはまだ農業はどうだろう。原始的な農業はやってたという説はあるんですが、農業だってなにをもって農業と定義するかっていうのが難しいところはあるんですが、おおむね自然の恵みを手に入れるのに、野や山に行って狩りをし、あるいは植物、木の実や根菜類、芋の類を採集してくるっていう食料の獲得の仕方をしてた時代であろうと。特に重要視してよって言われているのが、櫓とか榎とかいわゆるどんぐりの仲間、それから栗、こういう木の実なんですね。これは貯蔵が利く。あの、江戸時代までは飢饉に備えて、米が取れなかった時に備えてどんぐりを採集して蓄えておくっていうようなことを山間地帯の、山間地帯というか山村というか、山のあたりではやっている。特に飛騨とかね。どうですか、50年ぐらい前までかな。まだ救荒作物の代わりにどんぐりを採集するっていうのが残っていたことが言われておりましたので。どんぐりは灰汁を抜かないと食べられないんですが、渋くて。灰汁抜きしなくてもよいのが栗ということになるんです。どんぐりの仲間でもごくごく一部ですが、灰汁抜きしなくてもよいのがあるんだそうですけれども、多くは灰汁抜きをする。灰汁抜きは茹でこぼして、水を替えてまた茹でこぼすというのと、栃の実ぐらいになるともうちょっと毒性が強くて、木の灰ですね、灰汁ですね、これを使って浸さなくてはだめだという、いろいろ灰汁抜きのテクニックは必要になる。灰汁抜きのテクニックが開発されたのが、おそらく縄文時代の後期に入ってからではないのかなと。それが一般的に普及するようになったのが、まあ、すぐに普及していくわけなんですけれど。その堅果類を上手にとっておけば、まあ、丸1年もつかどうかはともかくとしても、半年やそこらは平気でもつわけですね。それを小出しに出しながら、日々、狩猟だとか漁業だとかいうことで食料を得ていくっていうような、そんな生活の仕方をしてた、そういう時代だというふうに考えられているわけです。

大事なことはある地点に家を建てて、通年、1年を通じてそこに定住するっていうそういう生活なんですね。狩猟・採集・漁業で定住という組み合わせです。定住しなければ放浪生活ということになっちゃうわけですね。定住するか定住しないか、定住しないと放浪生活、獣の群れを追って、獣の群れの後をついて歩くというイメージがあるのですが、それはまあ旧石器時代の話でありまして、縄文時代っていうのは定住しようとし始めた、最終的に本当に定住というのは縄文の前期ぐらいからと言われるんですけれども、縄文時代の草創期や早期っていう、初めの頃は定住しかけて定住しきれない時代だったらしいんですけれども、前期ぐらいから一つ所に居を構えて、その住み着いた場所の周辺でいろんな種類の食料を探して、ということは特定の物に頼っちゃうとそれを取り尽くしたら尽きちゃうわけですから、季節ごとに様々な食料を手を替え品を替え種類を替え、少しずつ手に入れていくという、どうもそういう生活パターンを確立していた時代ではないのかなというふうに言われているわけなんですね。

それで、そういう定住した人たち、定住するようになってからの方が人口はどうも増えるようでして、定住する前、定住しきるその前の早期だ草創期だという時期の遺跡の数はそんなにたくさんはないんですよ。そして確実に定住するようになった前期以降にだんだんと遺跡の数が増えていきます。規模も大きくなっていきます。人口は増えていったんだろうな。人口が増えるピークが縄文時代の中ごろ、縄文時代の中期と呼ばれる時期なんですね。それも後半です。

これは全国的にそうかと言われると必ずしもそうではないんですが、東日本は中期の後半がどこでもピークだろうな。西日本はちょっと違うんですね。それで長野県、山梨県、それから東京・神奈川の山つき、埼玉の山つき、まあ西関東ですね。ここが特に縄文時代中期の後半の遺跡の数の異様なまでに多い地域なんです。異常に、その数が増えること自体がむしろ異常だと私は思えて仕方がないのですが、ともかくものすごい数の遺跡が残されます。遺跡の規模も大きいです。縄文時代中期後半の村を一つ丸ごと発掘してしまったという例も長野県でもいくつかあるんですが、家の数が30軒も40軒も50軒もあるっていう結構な規模の遺跡になるわけですね。下伊那も例外ではなくて、中期の後半というのが遺跡の数の、あるいは竪穴住居の数のピークになります。

ピークだということは人口も多分ピークだったということなのですが、それがぐんと減るんですね。中期の終わり頃に、中期の最後に、それこそ十分の一に減っちゃうんです。なんでだかよく分かりません。理由はよく分かりません。いろいろ説はありますが、そんな簡単に実態を説明できるような説得力のある説はなかなか出てこないです。気候が変わったんだ、寒冷化したんだ、というようなことをよく言うんですが、それはそれでいろいろな分析なんかで気候は確かにだんだんと寒冷化しているんですが、縄文時代で一番暖かかったのは前期なんですよね。それで前期が過ぎるとだんだん寒冷化していくんです。ところが寒冷化をある程度したところで中期の後半を迎えて、人口が爆発的に増えるわけです。ということは、ただ気温が下がったら人口が減る、遺跡の数が急に減ったりするような事態にいきなりなるのかということ、そうではないんですね。中期の後半よりは晩期や後期の方が、さらにいくらかは下がるんですが、平均気温が下がるようになったからと言って、ねえ、もっと気温の低いところに人が住んでいるんです。たとえば北海道。というわけで、気温が下がればなんでも人の生活に不利になって人の数が減るのかってことは多分ないと思いますので、まあうまくは言えません。うまい説明は出来ません。後期になってから、後期の前半くらいにいったん、いくらか回復するんですけども、後期中頃くらいからさらに遺跡の数が減り始めます。後期の後葉、後期の終わり頃、後期末葉から晩期の前葉、中葉と遺跡の数はほんのわずかしかな。この下伊那地域でもほんのわずかしかな、という時代が続くんですね。

この武陵地Ⅱ遺跡は、その一番人口が減った、遺跡の数が一番少なくなった時期の数少ない遺跡だということになるわけなんです。それを言いたくてちょっと長々とお話いたしました。

えーと、武陵地遺跡はこれです。発掘地というと、これが道路でこの道路の拡幅のために発掘調査をして、遺跡自体はこんな範囲でしょうか、おそらく。私、あまり無責任なことを言っはいけないのですが、現地を一回、案内してもらって行ったんですが、発掘の時点ではないものですからね。最近、行ったってだけなんです、遺跡の範囲としてはこんな感じかな。

南大島川、上が上流です。上流から下流に向かって南大島川が流れていて、こちら側の丘陵の裾側のところ、ある程度の傾斜はあるんですが、ここがどうも遺跡で、川に面したところに道路があって、ここを拡幅するために工事をして、工事に先立って発掘調査をしたということのようです。

これは下流側から上流を見ますね。発掘が終わった後、工事にかかったあたりでしょうか、これは。で、発掘が終わった後、工事にかかって、工事をしている最中で地形が削り取られているから傾斜の具合が分からないのですが、まあ、ゆるい傾斜、まるっきりゆるくもないけれど、だからといってきついという傾斜でもない傾斜地ですね。

遺跡っていうからには人の住んでいた跡だろう。土器や石器がいっぱい出て来るんですから、土器や石器を使っていた人たちの住んでいた場所だろうというんですが、発掘調査では家の跡を見つけることは出来なかったようです。お墓の穴の可能性も十分あるんですが、正確なことが特定できないことが多い直径1メートルとか50センチとかくらいの穴はいくつか見つかったようです。土坑と称する。ですが、まあそれだけで、家とか、なんかの施設の跡とかいうのはどうも、なかったんじゃないかとあつたんだろうけれども上手く把握できなかったということのようです。

で、そういう中で遺物だけはやたらとあるんですよ。遺物だけは非常にたくさんあるんですよ。大量の土器・石器があるんですが、その中でもさっきから話が出てきているとおり、特筆すべき遺物、これはめったに出る物じゃないよという遺物、これが土偶56点、それから土製耳飾りは550点あまり、まあ正確な数はきちんと最



最終的に整理してみないと分からないです。土器の中に混ざっていることもありましてね。断片がね。土器の接合はまだこれからということですから、接合している中で、おや、土偶の破片が一個あって、耳飾りの破片が一個あってということはあるわけです。それでその破片が出てきたおかげで、他のとくつついて、耳飾り四つに分かれて出てきたのが一つになった。四つだったのが一つになっちゃったとか、数の増減はそういうことであるかもしれませんが、おおむねこのくらいの数はあるだろうな。そのほか、中空動物形土製品とか土版とか土製品とか、これも一つ一つ説明すればなかなか面白い代物なのですが、いや、滅多に出る物じゃないです。少なくとも中空動物形土製品1点、土版2点というのは、これは東北地方に中心があって、関東や北海道にも出土するそういう資料なのですが、これより西の方には行かないんです。今まで長野県ではほとんど出ないということになっていたんですが、最近、だいぶ分かるようになりました。さっきからちょっと話の出ている松本市のエリ穴遺跡でかなりたくさん出たんですが、武陵地はそれよりさらに南、西南になるわけですね。おそらくね、土版や中空動物形土製品の分布の西南の端になると思います。これより南、これより西には今のところ出土例がない。将来は分かりませんが、というわけで土偶や耳飾りのように数がたくさんあるわけではない物であっても、貴重な例になるだろうなということです。

その土偶と耳飾り、展示のメインの土偶と耳飾り、まあ、耳飾りがメインですが、一緒に土偶を出してもらってあります。それで土偶と耳飾りがやはり只事ではない。なんで只事ではないか。土偶56点という数は只事ではないです。耳飾りの500という数も只事ではないです。なんで只事ではないの、珍しいのかいというふうい話ですが、こんなにたくさんは出ませんよ。土偶というのは非常に出方が偏在します、偏ります。縄文時代を通じて出て来るものではないのです。いつでもあるわけじゃないんです。ある時期とない時期とあります。縄文時代の初めから、所によってはあるんですが、初めの早期とか、あるいは草創期まで上がる例は最近、見つっているんですが、それこそ日本中探しても2点とか3点しかない。

土偶がたくさん作られるようになるのは中期なんですが、中期、後期、晩期とたくさん、たくさんというか普遍的に作られるようになるんですが、その中でも時期によってはあったりなかったりする。たとえばこの辺を例に取れば、後期の前葉にはたくさんあります。ところが後期中葉にはばたっとなくなります。そして後期の後葉にまた出てくるっていうすごく偏りがあるんですね。それから場所によって出る地域と出ない地域とある。西日本は特に出ない。東日本でも所によっては出たり出なかったりする。それから土偶のある時期で、土偶があるよ、この辺りではという地域であっても、ある遺跡とない遺跡の差がうんと著しい。ない遺跡は一つもない。同じ時期なのに隣の遺跡に行くと20、30、50と出る。非常に偏った出方をするんですね。

それで縄文時代の後期の前葉、後葉から晩期の末にかけて、合わせると約800年間くらいになるんですが、これは関東甲信地域は土偶のある地域で、南信ではどうかというところ後期の後葉から晩期末葉の土偶がどのくらい出ているかという南信の数をそこに挙げたのですが、武陵地で56、中村中平66、中村中平は飯田市です。それから中越、宮田村ですが11、百駄刈、これは伊那市ですが7、大花、富士見町ですが9点で、7点9点多いんですよ。あるよあるよと言っても1点か2点なんですよ、普通は。後期や晩期の遺跡で出るよと言っても1点か2点で、全然出ない遺跡もいっぱいあるんですよ。7点9点多いのに、その中で武陵地の56、中平66、これは突出してますね。南信で単純に数を比べれば武陵地は2番で長野県中探しても50とか出る遺跡はそんなにたくさんはないです。それこそ武陵地は確実に10本の指に入ります。後期や晩期の土偶だけで言えばね。中期の土偶はちょっと出方が違うんですが。数だけでもちょっと只事ではないんですね。

それで耳飾り、耳飾りというのは非常に土偶どころか、もっとももっとも偏るのです。出てくる時期がうんと限られる。耳飾り、耳を飾るというのは縄文時代のかなり早い頃からあることはあるんです。縄文時代の早期という時期から前期にかけて、石で作った耳飾り、玦状耳飾り、中国のお宝の中に宝石の製品、宝石と言っても翡翠とかいう類ですけども、これで作った輪、なんと言ったらいいんだろう、輪、玦って言います、玉玦。耳

を飾る道具ですね、おそらく、腕輪なんかを使うのかという気はするんですが。帛って言うのは傷口、切り口って意味で、輪っかなんだけどその一隅に切れ目が入っている。その玉帛の形に似ているから帛状耳飾りだと言うんですが。その縄文時代の早期から前期にかけてです。それが一時、流行るんです。一遺跡で山ほど出るというのは、その帛状耳飾りを制作している遺跡以外ではそうめったにはないんですけど。耳飾りが流行るのはそれが一回目。二回目に流行るのが縄文時代の後期、晩期。その後期、晩期の話でとってもとっても偏在するんです。出る地域が限られています。

一つ二つ出ると言う所はそれなりの広がりを持っていますけれども、まとまってたくさん出ると言うのは、長野県、山梨県、静岡県、そして東京と埼玉の西側、群馬。北関東だと栃木まではまとまって出る遺跡があるんですが、北西関東から甲信地域限定で、これ以外の地域で何十も出る遺跡はないです。

というわけで、うんと限られた時期、地域しか出てこない。その上、たくさん出るよって言ったって50です。100出たら、おお、これは凄いな、っていうことになります。南信でたくさん出ている例で挙げれば、中村中平で762点だっているんですね。武陵地は550くらいだろう、その次に田中下って書いてありまして、これも宮田村なんですが、中越と一緒にだ。数が黒丸になっていてごめんなさい、58だそうなんです。それからさっきも出てきた土偶もあったという大花（富士見町）は212。これ以外の遺跡では出たって10だよ、10も出ないよってことなんです。

お手元の資料にもあるかと思いますが、出方に非常に偏りのある耳飾りを、後期や晩期の耳飾りを、上郷の考古博物館で2013年に企画展をやった時に図録を作って、その図録にいろいろ資料をつけてくれてあって、そこから引っ張ってきました。グラフで見てここ、ここが千点です、棒グラフを縦に並べてあります。棒グラフの棒が長ければ長いほど出てきた点数が多いってことです。ここが千点のラインです。千点を越えているのがエリ穴遺跡と栃木県の藤岡神社遺跡、500を越えているのが中村中平、群馬の千網谷戸、同じく群馬の茅野、山梨の金生。新潟上越ですけども、信越国境ですけどね、籠峰遺跡と、500を越えているのは七つか、それで武陵地はここへ来ちゃうんですよ。日本で7番目には間違いなく入る数の多さですけどね。日本で7番目と言ったら只事ではないですよ。日本でですからね。というわけなんです。

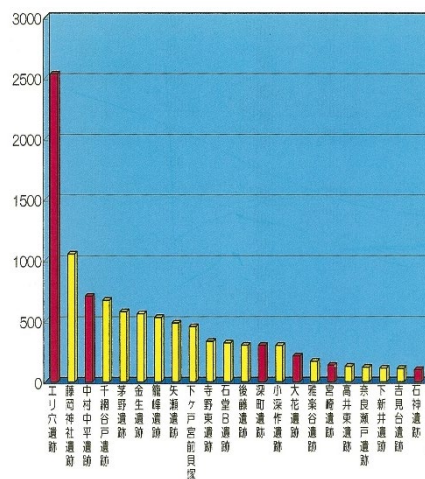


図8 土製耳飾りが大量に出土した遺跡

武陵地Ⅱ遺跡というのは、そういうわけで土偶や耳飾りが突出してたくさん出ている遺跡なんです。その土偶や耳飾りがどんな意味を持っているかという話をこれからさせていただくわけなんですけど、ただ数があるというだけではなくて、これの持っている意味は非常に深いものがあります。土器はまだ接合してありませんし、これからですから、ぜひこの整理作業をして、ちゃんと分析して、優れた資料をぜひ報告書として出して欲しいなと、この時代、この時期、そして耳飾りに興味、関心を持っている者とすれば、ぜひお願いしたいなと思います。講演の話を引き受けたのも、こんなよい遺跡を埋もれさせるのはいくらなんでも惜しいですから、ぜひ皆さんにアピールする、そういう機会でもあるなと思ったんで、今日、来たわけでありまして、ぜひこの整理作業をやって、良い報告書を作って欲しいなと念願するところなんです。

さて、この一番たくさん出ているエリ穴遺跡、2500を越えてまあ2600というんですがね。数は増減がありそうですから置いておくとしても、やはり飛び抜けた遺跡ではあるのです。この報告書を作るのに6年ほど私、関わらせてもらいました。定年退職で辞めたあと。それで今年の春に出たんですけど、そこでしっかり分析をさせていただいた部分がありまして、今まで分からなかったことがいくつも分かってきたのです。

その成果が武陵地遺跡を考える時に、そのまま採用できる。そのまま利用できる、おそらく。エリ穴を参考に

してもらえれば。同じところと違うところとおそらくあると思いますが、ものを考えるのにはエリ穴で使った考え方がそのまま利用できるだろうと思います。エリ穴との比較をしながらお話をするという部分が出て来るものですから、少しだけ紹介させていただくと、エリ穴は縄文時代中期の遺跡でもあるんです。中期から集落があるんですが、中期の末でいったん途切れて、後期の前葉に復活して、後期の前葉から晩期の後葉までつながって、連続して家の跡が残っているという、集落遺跡です。継続している中核的な集落であろうと思います。下伊那に限らず松本盆地でも同じことでありまして、後期の遺跡の数は少ないです。特に後期の後葉から中葉にかけては遺跡の数が大きく減って、遺跡の数が松本盆地全体で10遺跡あるかないかまで減っちゃうんです。下伊那の方がもうちょっと余計にありそうな気がするんですがね。そういうものすごく人口が減った時期に、ちゃんとしたまとめた集落が一体、いくつあるのかということ、おそらく三つか四つだろう。あの広い松本盆地です。そういう中で継続して営まれている以上、そして大量の遺物がある以上、松本盆地の中心の一つだろうな、というような遺跡なんですね。同じことが武陵地にも多分言える。中村中平という下伊那にはもう一つすごい遺跡があるのですが、それと並んでこの地域の中核になるんだろうな、武陵地はおそらく、というふうに思うわけなんだけれども。

土偶は400を越えます。それから耳飾りは2500を越えますので、エリ穴は武陵地の5倍から10倍かというものなんです。ただ、発掘した規模が違う、面積が。武陵地は道路だけです。道路の拡幅部分だけです。大した面積を掘ってないんです。それに比べればこのエリ穴遺跡は圃場整備に引っかけちゃったんですね。だもんですから、全部掘っちゃったっていう。だから5倍も10倍もある。武陵地だって全部掘ったら負けないくらいあるかもしれませんよ、ということになるわけです。

それで分かったこと、特に耳飾りについて、まあ話のメインが耳飾りですから。松本のエリ穴遺跡の整理の結果、耳飾りはどういうことが分かったか。

まず、出てくる出方。お墓に副葬するような可能性は極めて少ない。出てくる耳飾りの大半はゴミ捨て場、最終的なゴミ捨て場。この遺跡は集落があるんですが、集落域の外側にちょっとした傾斜面がありまして、その傾斜の斜面が遺物の捨て場になっているんです。最終的な捨て場だろうと思います。物を捨てる時にはただ捨てたんでは罰が当たるって昔は言いましたが、罰が当たるって縄文時代にはおそらく何かの祟りがあるとかね。ありとあらゆる生き物には、生き物だけではなくて道具 or 器物にもある。家にも道具にも、魂が霊が宿っている、というような発想をした時代なんじゃなかろうかと言われるわけです。だから土器が壊れたからポイッと捨てたら土器の霊が祟っちゃう。今でもあるじゃないですか、魂抜きって。魂を抜く、魂を入れるっていう言い方もしますが、抜くっていう言い方もします。捨てる時には魂を抜いてから捨てなさいよって。お札なんかそうじゃないですか。というのと同じで、多分、魂を抜くような作法があって、それをやった上で最終的には捨て場に捨てる。要らなくなった物ですから最後は捨てるわけです。大半の耳飾りは最終的に捨てられて出てくる。99パーセント以上。ということが分かります。

それから耳飾り自体をよく観察すると、耳飾りにはいろいろな図柄が描いてある、文様が。文様の系統性が分かったんですね。いくつもの系統がある。その系統が少しずつ変化して、時間の差もある。古い耳飾り、中ぐらいの耳飾りや新しい耳飾り、末期の耳飾りと十何段階かの変遷を辿ることができるというようなことが分かってきました。

それから一緒に出てくる土器の分析も結構、うまくできまして、その結果、耳飾りと一緒に出てくる土器は、縄文時代の後期の末葉から晩期の前葉に限定的である。後期の後葉以前の耳飾りというのはほぼないだろう、それから晩期中葉以降の耳飾りもほぼないだろう。確実にゼロかどうかまでは分かりませんが、おそらくないのではないかと。ということになると後期の末葉から晩期の前葉ですからおそらく実年代で300年間、300年間限定で耳飾りは大量に作られた、その前とその後には作られたかもしれないが微々たる量であった。そういうこ

とが分かってまいりました。

それで耳飾り、やっと耳飾りですね。時間も話の前段でたくさん使っちゃいましたけれど。現物を見ていただくのが一番いいんですけど、展示に回っていて、展示ケースでケース越し。耳飾り自体は小さいです。小さいものは直径1センチにも満たないし、いくら大きくても直径6センチか7センチくらいです。小さいのですね。だからケース越しだとよく分からない。私ももう老眼鏡をかけなければ何も見えませんが、今日、お出でのみなさんは私よりもお歳を召された方の方が多いぐらいで、ケース越しに見てシャープに見えるかなあというところ、ちょっと心配があるんですね。せっかくなので、写真もよいかというと、真上から撮った写真だから立体感がなくてね。それでこれ見てもどうだろうなあ。やはり現物を手に取って見るのが一番いいけれど、展示会の最中はそんなこともできないしねえ。展示会終わったら、整理作業とかやっているところへちょっと寄っていただいて、ちょっと触らせろと言ったら、館長さんが多分触らせてくれると思いますので、本当に見るならその方がよいと思います。展示会で見るよりわね。でもどんなものがあるか、ここで見て行ってください。

えーとですね、耳飾りは土製だから、土の、土製耳飾りと呼んでいるわけなんですけど、耳飾りは大きく分けると、こういうのと、こういうのとあります。どう違うのか。こういうのとこういうの。真上から見た写真です。だから立体感がなくて、斜めから見たら立体感があってよく分かるのですが。ちょっと真上から撮った写真しか



用意できなかったんで。

これは真ん中が詰まっています。こっちは真ん中が抜けてます。まあ、環ですね、環形。こっちは何に似ているかというと、お餅をつくときに使う臼に似ていると、似てるかな、似てくはないけれど、まあ、何に似ているかって言うと何に似ているかなあ、まあ円筒形ですね。真ん中が詰まっていますね。こういうのを臼形とまあ、呼んでます。あ

あ失礼、これは臼形でこっちは環形って呼んでます。

それで臼形の耳飾り、あとでこれは耳にどう着けるんだという話をするんですが、正面と背面とあります。正面というのがよいのか、お腹の面、腹面というのがよいのか。それに対して背中、背中側。耳に穴をあけてここに嵌めこみます。そうすると正面側、耳の正面側を向くし、裏側も向いてますね。正面側と裏側とははっきりあるんです。それで文様や図柄が描かれるのは正面だけです。正面の画面はまるごと、全部これが画面になります。臼形は。環形は真ん中が抜けちゃってるから、ないところに絵は描けないから、この周りの周辺の側だけが図柄を描くスペースになります。

ということで文様を描きたかったら、描ける画面の形と大きさが違うんです。そうすると描かれる図柄も当然違いが出る。環形と臼形の違いはうんと大きな違いなんですね。耳飾りの中でも環形の仲間の耳飾りと臼形の仲間の耳飾りでは、描かれる図柄が根本的に違う、とまあそういうことになるわけであります。

ではご覧ください。臼形の耳飾りからお見せします。赤く塗ってあります。分析すれば出るでしょう、おそらく朱が出ると思います。水銀朱。長野県内の分析例が最近、蓄積されてきているんですが、ほとんど全部、水銀だそうです。鉄や鉛でも赤は出るんですが、それを使っている例はほとんどないみたいです。で、ここ、ここ、ここ、これは外側です。これ、真ん中です。環形の耳飾りはこの外側があるだけ、臼形の耳飾りは真ん中もある。私、場所の名称として、部分の名称として名前をつけました。これ外側ね、「側」です。真ん中、真ん中だから「芯」です。というふうに名前をつけました。芯というのは草冠の芯、草冠に心と書いて芯、という字、読ませますよね。真ん中って意味です。これが「芯」、こっちが「側」、「側」は飛び出しています。「芯」の



部分はちょこっとへこんでいます。まん真ん中に瘤みたいなのがついてます。飛び出している。その真ん中が穴が開いて、ここが欠けています。ここも欠けています。だからひしゃげた形をしています、これと本来は同じ格好で、上から見たらまん丸の円。で、「側」が飛び出しています。真ん中が飛び出していて、その中間がへこんでいます。



これ、この「側」が残念ながら発掘の時点かその前から分かりませんが、削れてとれちゃったんですが、色が変わってますから削れて取られてるんですよ。で、ここがもともと出っ張っていたはず。「側」は出っ張っている、ここがへこんでいる、まん真ん中はやはり瘤状についていて、飛び出していて、真ん中に孔が入っている。



これも同じ、なんかちょっと違うな、見た目が。なんかちょっと違う。何が違うかというと、ここ、この「側」は飛び出しているんですが、真ん中も瘤状に飛び出しているんですが、この真ん中が狭いのね、へこんでいるところが。これは真ん中のへこんでいるところが広い、さっきのやつも広がった、こいつは狭いんです、これ直径が小さいんですね。直径が小さかったもんだからこのスペースがとれなくて、ちょっと違和感があるような格好になっていますが、さっきと同じ。



次のこれは、これに近いよね。さっき見たこれにね。よく似てるでしょ、みんな。図柄で言えばこれはなんだろうな。丸、丸、同心円。ここを中心とした同心円なんですよ。という図柄ではないでしょうかというふうに見えるわけですね。で、これはさっきお話ししたエリ穴遺跡出土で、似てるけれどちょっと違う。ここ、「側」は飛び出している。ここは幅広くへこんでいる。真ん中も瘤状に飛び出しているが、なんか刻みがついてるなあ。刻みがついているかいけないか、プラスもう一つ。これ、これ、これ。同じのを交互に今、出していますが、この中心の穴の直径を見てください。これとこれとどうですか。こいつの方が明らかに大きいよね。この耳飾り全体の直径とこの穴の直径と、中心孔の直径で言っても、比率で言っても、これの割合って大きいよね。

これはどうだ。これもエリ穴です。これは小型の耳飾りですが、直径に比べてまん真ん中はどうか。やはり広いよね。これはもっと広いよね。これが古い順から新しい順に並べた変遷です。この同心円のタイプの。真ん中が広くなる、真ん中が広くなると、その分、どっかが狭くなる。このへこんでいる部分がだんだん狭くなる。だって比率で言えば真ん中をでかくすると、その分どっかを縮めなきゃいけないわけですから、どこを縮めたかと言うと、ここを縮めたってことになるわけです。



それともう一つ、ここの刻み。刻みはここから出て来るんですが、真ん中から出て来るんですが、真ん中が、これが穴が小さければ、突き抜けた穴が小さければ、刻みはおそらく入れにくかっただろうと思うけれど、穴がでかくなれば入れやすくなって、確実に全部入れていくということになるわけです。まあここまでかな。

こんなわけで図柄の違いと言ってもちょっとした違いなんです、ちょっとした違いで時間差が読み取れるということが分かってきたんです。ほかにもいろいろ系統を捕まえることは出来るんですが、エリ穴はたくさん捕まえることが出来たんですが、武陵地の場合はどうかって言いますとね、今、お見せしたこの系統はよく分かるんですが、それ以外の系統は全体像が分かる、形のよく分かる完全な形に近い耳飾りの数が少ないんですよ。エリ穴だって少ないんですが、2500もあればそれなりに全体像が分かるのが出て来るんですが、ここは500ですからね。全体像が分かるのはそんなにたくさんないので、系統性をたどって並べていく、時間の順に並べていくのはちょっと難しいかな。

あとはちょっと違うやつを紹介いたします。これは武陵地のです。これは同心円、さっきの物よりもっと同心円だが、同心円の円の数が多いいね。線の数が。ここ真ん中、一度へこんだ線、飛び出した線、またへこんだ線、一、二、三、四、五重の円だね。さっきのは外側とへこんだところと真ん中だから三重の円だったけれど、これは五重の円ですから、多分、仲間がちょっと違うんだらうな。同じ同心円で近い仲間だけれど、ちょっと図柄が違うんだらうな。



これだって同心円だ。刻みは一番外側にある。そして真ん中に出っ張っていない。さっきのグループは、系統性を追えるって言ったグループはここが飛び出していました、ここ、飛び出していない。だからこれも同じ同心円、近い同心円だけれど、ちょっと違うやつらなんだな。これとこれはおそらく近いでしょう。ここが飛び出していないからね。だけど刻みがこれは外側にあったんだけど、これは真ん中にあるぞ。これ、多少の違いですね。これが時間差かどうかまではちょっとまだよく分かりません。



これは真ん中の穴がちょっと大きいですね。だからさっきの最初にお見せした系統と同じに考えれば、中心孔の比率が高くなったんだから、ちょっと新しいなという気がします。



これはこっちが欠けて、半分ありません。半分しかありません、残念でした。で、どうでしょう、やっぱり同心円じゃないですか。線で繋げていないけれど、点、点、点で点列だけれど同心円が一重、二重、三重になっていて、この中間、無紋の部分もひとつの帯状だとすれば、四重の同心円かな。線で繋ぐ同心円と点で繋ぐ同心円は図柄は一緒なんで、すごく近いんだらうと思うんですがね。でも表現方法はちょっと違うんで、やはり別のグループかな。

この耳飾りはこっち側が欠けています。欠けてます、残念ながら。で、こっち側の残っているところも一番外側、「側」って言った部分は壊れて削れちゃってて、ないんですよ。でもこの線を見て行くと、線が入っていますよね、ここに。この線を見ていくと明らかに一周していそうなんで、だから外側の「側」のすぐ下に線を一本入れて、ぐるっと回って、「側」と「芯」との間を線で区切っている、おそらく。



で、図柄です。どういう図柄か。線でへこんでいるところと出っ張っているところとあります。出っ張っているところを追っかけてきます。こういうふうに行きます、こういうふうに行きます、こういうふうに行きます。ぐるっと回っておそらくここに戻ってくる。模式図で書くと、どうですか。今、出っ張っているところを拾ったら、こんな図柄になりませんか。これはここでスタートして、出っ張っているところをなぞって行くと、元へ戻ってしまう。無限に同じところをぐるぐる回るって図柄なんですね。その図柄なんだけれど、ここがやたらと幅広いじゃないですか。しかもまん真ん中のここが出っ張っている、出っ張っているところになんか繋がっていきそうですね。真ん中の方には繋がっている、外側にはここ、欠けているからどうも分からないけれど、どうもなんか繋がりそうもないよね。



これはエリ穴です。今の図柄、私がそこに模式図を書いた図柄と同じでしょう。これはちょっとここ幅広くて、ちょっと違うけれど、外側のこの図柄は一緒だよ。しかもこの図柄は内側のここには繋がっているけれども、エリ穴のこれも内側は繋がってるよ。外側は繋がっていないよ。外側の「側」とは切れてるよ。中心のまん真ん中とは繋がってるよ。そういう点でも共通なんですね。だから同じ系統で同じ時期で、ちょっとだけ図柄が違う。それは松本バージョンと高森バージョンの違いくらいかな。でも基本的な図柄はすごく近いな、というわけです。



エリ穴のいろいろな検討の結果、このタイプの変遷の中の第4段階というやつでして、縄文時代の晩期に入っ
てすぐって言うくらいの時期であろうということが分かってますので、武陵地のこれも同じ時期でいいだろうな
というふうに思います。

次にこれはどうでしょう。ここ欠けてます。ここも欠けちゃってます。です
が、これ見てください。線が「側」の裾をずうっと、おそらく一周しているだ
ろう。そういう点で言えばこの線と同じような役割を果たしているんだらう
な。「芯」と「側」とを分ける境の線だろうな。境界線だ。それを持っている。
で、ここに三角形を削り込んでいます。ここにも三角形を削り込んでいます。
ここは欠けてますが、おそらくここにあってここにもありますから、二個一對
の三角形が削り込まれていて、その三角形と三角形の間に丸、丸、ここのは点
と丸、まあ丸をちょっと省略したか書き忘れたか、ここも同じ。というふうに見るか、この三角形はこれとこれ
とが組み合っていて、真ん中にバナナみたいな格好の線が描かれているか、どっちでもよいというよりは多分、
どっちかなんでしょうが、どちらかは分かりません。エリ穴には2500あったけれど、これは見たことがあり
ません。ではこれが武陵地独自の耳飾りかと言うと、独自かもしれませんが類例がない。武陵地でもこれ一個し
かないんです。この断片が他にもあれば、これは武陵地特有のタイプだな、いくつもあるぞってことになるん
ですが、一つしかないんです。たまたま武陵地で出て来たけれども、全然他の地域の他の系統かもしれない。でも
エリ穴にもないし、あまり見たことがないんですよ、こいつは。でも図柄としてはなかなかしゃれていて、結構
よい図柄ですね。こんなよい耳飾りなのにどこに繋がるのか分からない。



これはどうでしょう。これもエリ穴にない。これは分からない、困った。外側
の「側」はなんとなくあるような、ここは「側」と「芯」との境が明瞭になるけ
れど、ここは明瞭ではないので、さあどうしよう。で、穴が四つ、透かし孔です。
「側」があって真ん中の芯の部分に切り込みを入れて抉り取って、透かし孔を四
つ開けています。それからここになんだらう、これ。アルファベットのSに似て
いるか。クランクか。おそらくこれは巴だと思います。巴。巴の先と先がくっつ
いちゃった。巴と言う図柄は耳飾りでよく使われます。それで私も見慣れている
んです、これだけは。まん真ん中に巴、あるいは巴がくっついた筋状と言うか蛇



行する線と言うか、こういう図柄はよく見るんですが、周りがこんなふうに透かし孔四つで、しかも整った透か
し孔です。透かし孔の縁取りをしていて、しかもここに対になる三叉の、三叉紋っていうんですが、三つ又の透
かし孔がさらに入っているっていう。こんな組み合わせは見たことない。でも図柄としてはすごくしゃれていて、
作りも丁寧で、とてもよい耳飾りだと思います。ですがこれは類例を探さなくてははいけません。まだ探せません。
分かりません。こういう円を四つ配置するっていう例は、関東の後期の末の耳飾りの中に類例があるんですが、
それと繋げてよいかどうか自信がないです。中間がないので、研究課題です。

以上が臼形の耳飾り。穴が開いているけれど環形じゃないよ。これは一度、中心も作っておいて切り込みを入
れて抉り取って透かし孔にしたんだよ。こっちは、これねえ、これしか残ってなくて、こっち側が欠けているん
ですよ。最初から環っかです。「側」しかない。「芯」はない。環形の耳飾りです。以下、環形の耳飾りになり
ます。

ここを見てください。これはくっついちゃった巴だよ。巴の両側に三つ又があります。その、浮きあがってい
るところも巴だけれども、へこんでいるところを辿っても巴だよ。これは付かない巴、真ん中は付く巴。それで
付かない巴の外側に三つ又がくっついちゃっています。ここにもう一つ三つ又があって、ここここにもう一つ

三つ又があって、真ん中に巴があるんじゃないかな。この三つ又の脚が長いんですよ。先がグーンと伸びていくんですよ。この三つ又は先に伸びないから同じ三つ又でもちょっと図柄が違いそうだな。これどうなるんだろう。よく分かりませんが、少なくともここだけはちょっと分からないが、ここはよく見ます。エリ穴にもたくさんありますし、武陵地にも似たような例は、破片でもっと小さく割れちゃってますが。で、巴、両側に三叉文。巴を真ん中の、まあ、玉に見立てて、玉を抱くように両側に三叉文が配置されるという、巴玉抱き三叉文というこういう言い方をするんですが、そういう例でして、これはエリ穴もそうだしここもそうだし、中部高地でたくさん見る、晩期の初めの耳飾りです。これもいろんな変遷があるんですが、その変遷を並べてお見せできるような、よい破片がないんですね。小さい破片ならば少しはありますけどね。



これ、浮き上がってる部分、巴です。巴の真ん中にもう一つ丸が入って、丸を繋げて、丸に繋がって巴が繋がっているということになります。この外側に三叉があります、三つ又のへこみがあります。だからさっきの図柄とよく似た図柄です。微妙には違うところがありますが。これ、破片でこっち側がそっくり抜けちゃってます。残念でした。



これもくっついた巴です。その両側に三叉があります。三叉がへこんだ巴とへこんだ方の巴とくっついちゃってます。巴玉抱き三叉文。この巴玉抱き三叉文の外側にもう一つ、図柄がある。弧線。半円形といったらよいか、弧状の線があるんですね。弧状の線が、一つ、二つ、三つ、四つ、それとまん真ん中。この組み合わせ。弧線と巴玉抱き三叉文を組み合わせた。これはエリ穴に非常にたくさんあります。エリ穴以外にも中部高地でたくさん見ますし、武陵地でもこの仲間はいくつも出ています。これは中部高地では普遍的な、特有の耳飾りであろう。中部高地によくあるタイプの耳飾りであろう。こっちが欠けちゃってます。



さあ、これはどうでしょう。これは環形の方に入れたが、環形か臼形かよく分からない。ひょっとしたらこのまん真ん中がでかい透かし孔なのかもしれない。でもこんなところにバナナみたいな格好の隆起部分があるんですよ。ここに刻みを入れて、ここに刻みを入れて、ここに何もなければ最初にお見せした同心円のタイプに近いんですが、これが入っちゃうとそうはいかなくなっちゃう。臼形なのか環形なのかよく分かりませんし、この類例も見たことないなあ。困ったなあ。困ったなあ、類例がないなあという例も結構あるんです。



これはここに円と言うか楕円と言うか二つ並んでます。真ん中、三叉、三つ又ではなくて四つ又に決ってます。で、こいつをこれがひとまとめの一对の円と、真ん中の四つ又、その周りを三つ又で囲っている。同じ単位がここにあって、多分ここにあって、ここにあって、欠けているけれど多分こっちにもあって、4単位あるんじゃないのかなということです。さっきお見せしたこの弧線は内側に円弧が来て外側に開いてました。こいつは内側に開いていて外側に円弧が来る、弧の向きが逆です。おそらくだから系統が違います。別系統だろうと思います。



これはここに瘤がついてる。内向きの弧があって、残念ながらここで欠けちゃってますね。同一個体なんだろうけれど付くか付かないかよく分からない。ここに付けてよいのか、もうちょっと別なのか分からない。で、これが1単位なのか、ここに1個しかないのか、それとも四つあるのか、いや二つなのか三つなのか分からないなあ。これも内側



に向かって開く弧線というのはあることはあるんですけども、うまい具合に系統が捕まえられていません。

これは、ちょっとここは暗くていけませんが、同心円です。環形の耳飾りのくせに、臼形の耳飾りと同じような同心円を描いているということなのですが、でも刻みを入れる場所とかも、また違いますのでね。

これはどうでしょう。真ん中に飛び出しています。瘤があります。で、瘤の真ん中にひとつ突き刺した穴があります。さあ、点々が同心円を描いているように見えるか、それともただランダムにつついているだけで、たまたま同心円を描いたように見えるところもあるが、なのか。一番外側の角のところにも点列がついています。で、ランダムにただべたべたと刺突を正面側に全面的に入れるのは中期の耳飾りの装飾なんです。それだとすればこれは中期の耳飾りです。ただ中期の耳飾りはこの角のところに点々を入れる例は皆無なので、さっきから出てきているように後期・晩期の耳飾りの中には、この角のところに、部分的にしても刻みを入れる例は少しはあるんですね。そういうことを考えるとこれは後期かな。ここ真ん中飛び出していますが、これ、さっき真ん中に瘤状の飛び出しがあるぞって言ったそれとそっくりですから、そうするとこれは後期かな。後期や晩期、ここで問題にする時期の耳飾りなのかな。判断に迷っています。



というわけで武陵地遺跡に出てきた耳飾りの、完全に近い形の、見栄えのよいのをご紹介します。

ちょっと話の中でも触れましたが、系統がいくつもあって、その系統によっては時間差が捕まえられるのもあるよという話を申し上げました。

では、次へ行きたいと思います。

次はですね、耳飾りって本当に耳飾りなの？というんです。

直径5センチとか8センチとかあるんですよ。そんなもの耳朶に入るのかいな。それで資料の4を見ていただきたいんですが、表1と表2があるんです。埋葬された縄文人の人骨が出てくるケースが数は少ないんですがあります。貝塚なんか行くと割合と残りがよくて出るんですが、内陸部ではなかなか骨は残りません。みんな腐っちゃいます。

その埋葬された人骨に伴って、一緒に耳飾りが出てきた例を一覧表にしてありまして、これは吉田泰幸さんの表だったかな。で、こんな表を見たってよく分からんよって言うんですが、確かに分かりませんね。表1はともかく、表の2を見てください。

表2 人骨に伴う耳飾りの時期・地域別集計表1 (カッコ内は土製栓状耳飾の点数、表3も同じ)

	西日本		東日本	
	女性	男性	女性	男性
縄文前期	3			
縄文中期			4 (4)	
縄文後期	2	2		
縄文晩期	4	6 (1)	1 (1?)	1

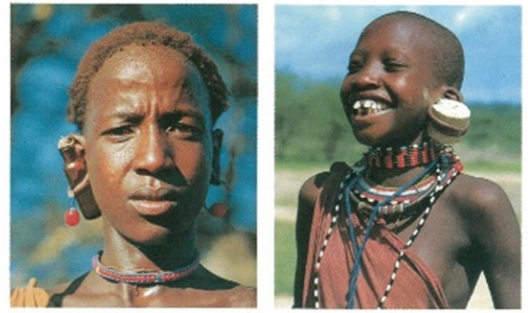
時期別に人骨に伴う耳飾りの男女別の集計をしてみたって言うんですよ。そうすると女性の方がちょっと多いが、でも男性だってあるぞ。で、その中で人骨に伴うだけじゃなくてその人骨の頭部、頭、頭の部分の両脇、あるいは片側の脇、二つ揃って出てくればいいんですが、対で出てこないケースの方が多いんです。耳に当たるような位置から、耳飾りが出ている例が何例かあるんです。それで耳飾りの可能性です。

次にこれを見てください。これは土偶です。中谷遺跡、山梨県です。富士山麓の遺跡で、都留市になります。縄文時代の晩期の初め、前葉の土偶です。これが目ね、それで鼻が欠けて落ちちゃってます。耳を見てください。これ耳ですよ。そしてこ



これは耳飾りではないですか。さっき見た点列の同心円。点列で同心円を描くのがあったそのものではないですか。決まりだね、これで。耳飾りでよいでしょ、これならば。

次にケニア、現代のケニアです。マサイ族っている人たちがいます。牧畜をやっている人たちです。背がうんと高い。男性の平均身長が1メートル80ぐらいあるっていう、とんでもなく背の高い人たちです。勇敢なことが有名で、勇敢さを誇りにしている人たちです。



ケニア マサイ族 左・右：戦士、中：少女

これは少女だというんですよ。顔だちをみるとどうでしょうね。10代の前半かな。耳朵に穴を開けて何か入れているよ。

こっちは若い男性。マサイ族の戦士だそうです。隣の部族と戦争なのか、今はしないでしょうけれど、かつては戦争したんでしょうね。とっても勇敢で、槍一本でライオンを仕留めてくる、それが成人式だっていう、言い伝えです、本当にそうかどうか分かりませんが。マサイ族の男が一人前と認められたかったら、一人で槍一本でライオンを一頭仕留めてこい。

見てください。耳朵に穴を開けて、瓶を刺しているよ、刺せるんだ、これ。まあ、これはピアスですよ、今の若い人たちはしますが。昔は若い人たちだったけれど、今では高齢者でもしますね。十分大人になった人たちだってやっている人はいますよ。そういうわけでこういう例と、さっきの表で面白くありませんけれど、人骨の周りから出ているっていうのを考えてみると、耳飾りでよいんじゃないのかな。異論が全くないわけではないですが、考古学の研究をしている人たちの中では、耳飾りでよいだろうというふうに今、考えられています。この三つが根拠になりまして本当に耳飾りであろうと、それを前提にお話を今までしてきましたし、これからもしていきます。

実はここまでの話がさっさと終わるつもりでいたんですが、ここまでの時間を食っちゃって。資料のラストに製作方法という話をつけて。この話を入れなきゃ、時間が足りなくなるかな。時間が余ったかもしれないなと思ったんです。今度はこれやってたらこの話ができなくなっちゃう、ごめんなさい、余計なものをつけました。エリ穴遺跡でいろいろと観察した結果、耳飾りの作り方に規則性があるってことも分かったんです。なんでもかんでもこんなもの、作ればよいだろう。粘土で直径が1センチから大きいのは5センチ、7センチ、8センチ。厚みはいくら厚くても2センチ半、例外でもうちょっとでかいのはちょっとだけありますけど。こんなものですかから用意したそこにある粘土を持ってきてこねこねってやって形を作ればできるだろう。そうじゃないんです、違うんです。そんなことしてないんです、っていう話だったんですね。ああでも今、折角そこまで行ったから、ごめん、ちょっとやるか。

レジュメの一番後ろに当日追加と言うのをつけました。写真が載っているのではない方、字がいっぱい書いてある方です。

で、何がどう分かったかという、耳飾りの一部分に破損、これは壊れていませんが、壊れているやつもありまして、壊れたところの割れ口を観察すると、時に粘土が剥がれた痕跡があるんです。一緒に作っておいて、うまい具合に粘土がくっついてなくて剥がれちゃった。その剥がれた痕跡を丹念に拾い集めてみると、耳飾りというのはこの模式図にあるとおり、粘土の帯をまず作るんです。2センチから3センチの幅の粘土の帯を。これは紙で作った模型です。これをクルクル、クルと丸めるんですよ。そうするとここに渦ができますね。でもここは文様をつけるところですから、指であるいは何かの工具を使って、丁寧に撫でて撫でて撫でて時には削って、平らにして、その痕跡は消しちゃうんです。時に日本の耳飾りの中にはそれは面倒くさいって言って、その渦を、筋を残したままにして、焼いちゃった。焼くんですよ。耳飾りは焼き物です。土器と同じに焼くんです。野焼き

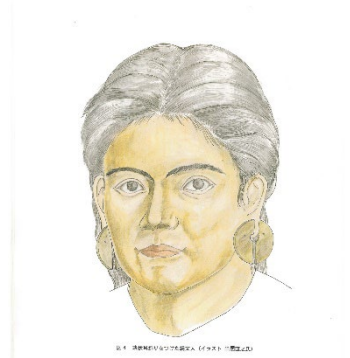
するんですけど。というのがぽつぽつと出てきて、武陵地にもあるんです。

それでここが剥がれやすいんです。しっかりと押しつけてしっかりと作ればよいのですが、雑に作ったら、ここは剥がれちゃうんです。焼いてからあと。で、剥がれた痕跡を丹念に拾っていくと、渦でした。全部です。全部と言いたいけど、ちょっと違うのがある。その中にこういうのが観察されるのがあるんです。薄い面の、帯にしないで薄焼き煎餅みたいな形に作る。もう一個作る。重ねる。もう一個作る。重ねる。で、押しつけて、その外側にさっきの粘土の帯を持ってきて、これをくるくるくると。ここでスパーンと割れちゃった例があって、それを見たら、この筋が見える。一番外側に包んだこの側の部分は縦の筋で出来て、真ん中が横の筋です。この「芯」と「側」の厚みが違う場合、「芯」がうんと薄い場合は多分この作り方、「芯」とかの厚みが違うやつは、ぐるぐるぐるこれだ。これは断面の観察で分かって、他の遺跡でも類例を探したらいくらでもあって、武陵地でもいくらでもあるんです。ということだから、耳飾りはこういう作法があって、作法に従って作っている。なんでもいいからってこねこねこねでは絶対じゃない。ということがよく分かりました。で、このベルトは、粘土の帯は土器を作るやり方、そのものです。土器だって粘土の帯をぐるぐるくると蛇がとぐろを巻くように巻き上げていくわけか、もしくはぐるっと輪を作ってそれを重ねるか、どうしても帯がベースになるんです。粘土の帯が。同じです。多分ね。

日常的に土器を作っている人たちがいて、その人たちが耳飾りを作る時に、普段使って作っている使い慣れた粘土の使い方をして、耳飾りを作った。粘土の帯で耳飾りも作るんだ。多分、土偶も同じで、他の物もみんな同じだと思います。いったん粘土の帯を作っておいて、それを丸めるなり何なりいろんなやり方をして、目的の形を作っていく。そういう作り方をする、これがまあ耳飾りの作り方です。作法があります、ということが分かりました。

それではもとに戻ります。

耳飾りの着装方法、5番目です。というところに話が戻ります。
着装方法ってこれだよ、耳穴に穴を開けてピアスではめ込むんだ、なんですが、さっきの話、ちょっとだけ話をすると、縄文時代の早期から前期にかけて、石で作った耳飾りが一時、流行った。玦状耳飾り、切れ目を入れた耳飾り。これです、現物をお見せすることも、できないことはないんでしょう、高森にもありますよね。玦状耳飾り、持ってないかな、収蔵品の中には。でも下伊那地域でもいくらでも出ますから、探そうと思えば探せると思うんですけど、ただ武陵地と時期が全然違って、もっと古いんです。



これは切れ目が入っているんですよ。これは耳穴から吊り下げるんです。耳穴に穴を開けることは一緒です。耳穴にそこそこ大きな穴を開けて、そこに嵌めこんで吊り下げる。それに対して、さっきのマサイ族の人たちと同じですが、耳穴に、なんと言ったらよいのでしょうか、埋め込むって言ったってね、耳穴からいくらでも外れますから、これは。着脱自由ですから、耳穴のサイズと耳飾りの直径が合いさえすれば、嵌めて外して嵌めて外して、自在です。

それはだけどこれだって一緒ですよ。吊り下げ形だって嵌めて外して嵌めて外して。年がら年中これをつけている必要は全然ないし。

耳朶にまず、穴を開けなくちゃいけないんですよ。これにしたってこれにしたって、どっちにしたって耳朶にそれなりの穴を開けなきゃいけないんですよ。今ねえ、ピアスしている人はいますよね。ピアスも小さければ別に何ともないんですが、でかいやつはどうですか。見てね。失礼かもしれないけれど、グロテスクな感じの方が先に立っちゃあしませんか。でかいピアス。直径1センチを超えるようなピアスがここにポンと刺さっていたら、あるいはそのピアスを抜いて、直径1センチに近い穴が耳朶に開いていたら、グロテスクな感じがしませんか。



図1 土器時代の土器に穿孔した人（イラス・佐藤健太郎）

昔から「身体髪膚、これ父母に受く。あえて毀損せざるはこれ孝の初めなり」、と孔子様が言ったんだそうですが、耳朶に穴を開けると言うことは、体に傷をつけるということで、普通にすべきことではないと誰しも考えるはずです。誰しも考える傷をつける行為をあえてしなければ耳朶に耳飾りは入らないんですよ。というわけで、吊り下げるにしても何するにしても、まあ、耳朶に穴を開けるってことは単なるおしゃれとはちょっと言いにくいんじゃないかなというわけですよ。

その話を私、どこでしようと思ったかな。ここだ、もうちょっと先でするつもりのお話をここでしちゃった。話の組み立てが狂っちゃう、ごめんなさい。

さてですね、これをお見せする前にもう一回これで。この耳飾りの場合、さっきのこっちの場合は吊り下げるんですから、ぶら下げるんですから、多分、落ちにくいと思います。これはどうでしょう。これは落っこっちゃうんじゃない？、これは。このタイプの耳飾りの、耳に当たるところはまん真ん中ですから、側面の真ん中ですから、若干へこんでいるのが普通なんです。それは落ちないための工夫だろうと思います。ちょっとぐらいへこんでいたって、これでダンスでも踊ってごらん、絶対に落ちちゃうぜ。ピアスじゃ耳がちぎれちゃうぜ。ということなんです。それで、これを耳につけたかったら、この耳朶の穴とどんぴしゃりの直径が合った耳飾りしか入らない。小さすぎたら落ちちゃう、大きすぎたら入らない。ということは耳朶の穴と耳飾りの直径とは必ず一致しなければならないわけであって、しかも直接皮膚に触れるわけですね。身体に触れるわけですね。となると、「ちょっとあんたの耳飾り貸してよ、俺に付けさせろ」とできるかなんです。おそらくできないだろう。微妙に、たとえば直径が3ミリとか違ったらもうだめ。入らないか、すぽんと落ちちゃうか。

それに、あんたがつけてたやつを俺の皮膚につけるっていうの、やっぱり嫌じゃないですか。ちょっとあんたのはいてるパンツ、俺に貸してって言うのは嫌でしょうっていうそれと一緒に。身体に直接皮膚につく、触るものですからこれは貸し借りしないと思うんですよ。

ということはほぼ確実に個人所有です。それで縄文時代のいろいろな道具の中で、絶対間違いなく個人所有って言いきれものがどれだけあるか、土器はどうだ。土器は煮炊きの道具です。鍋や釜です。家族の共有物じゃないんですか、あれは。他の道具、石器の類、斧、あるいは土を掘るための打製石斧、やはり斧って言いますが、個人の持物である可能性ももちろんありますけれど、村の共有物である可能性もある。

絶対間違いなく個人か、とはなかなか言いにくいな。弓矢とか斧とかは個人の可能性はかなり高いだろうと、個人の所有物で大体いいんじゃないかと言われている物ではあるのですが、それでもね、一抹の不安はあるんです。だけどこれは、皮膚につける物は、さすがにそうじゃないだろうってね。

しかも図柄はさっきお見せしたように一定の規則性があって、たとえば同心円、類例はなかったけれど渦とかね、ちょっとよく分からないけれど三叉文とかいうのがペアで必ず入っていると、なんか規則性があるんですよ。フリーに好きな図柄を描いているのではおそらくない。ということになると例えば家紋のようなものだと思うって見たらどうか。私、自分の家の家紋って知らないんです。どうですか。私よりお歳を召した方が多いようですから、自分の家の家紋なんて知らんぞってあっけらかんとしているようなことはないでしょうが、家紋なんてあったかな、知らないよって、家が新しければね、新宅のそのまた新宅だとか言えば知らないよ、あるいはよ

そこから移住してきた人たちなんか、家の家紋なんて忘れちゃったよって。

それでこういう図柄が特定しているってことはある種、家紋のようなものでね。家の一族が伝統的に使っている図柄なんだっていうように考える可能性が十分あるじゃないですか。そう考えてよい可能性が十分ではないかな。

となると、個人の所有物で、しかも何らかのその人の地位みたいなものを反映している、家柄、血族みたいなものを反映しているとすれば、この耳飾りから縄文社会が読めるんじゃないっていうわけなんです。縄文社会について耳飾りから迫ってみようって。考古学やってる人間は、私もそうですけど、最終的には縄文社会のことを知りたいと思うわけですよ。土器や石器や耳飾りを扱って、日々、それをつついていきますけれど、それを究めるのが目的なんでしょうな。それを作った人たちの社会はどんなものだったのか。というのを究めたいわけですね。

だから耳飾りが縄文社会を究めるのに迫れる材料だとすれば、ぜひ迫ってみたいと誰しも考えるわけですね。項目の7, 8, 9あたりはその耳飾りから社会に迫ろうとした先輩たちや、私より年下の人もいますけれど、その社会論、「深読み社会論」と私は名前をつけましたが、耳飾りから深読みして縄文社会に迫ろうという社会論というのが7番、8番、9番くらいに書いてあるのです。

7番目は春成秀爾さん、私のお師匠さんなんですが、大学の恩師だったんですがね。歳は10ほどしか違わないんで、私が大学生のころは教授スタッフに入ったばかりでまだ助手だったんですが、論文をいっぱい、すでに助手のころから書いていたんですが、その人は社会論の草分けみたいな人です。この人ぐらいから始まってきたということなんですけれども、耳飾りの中には文様の付いているやつと付いていないやつがある。それはそうだしその通りです。それでその文様の付いているやつと付いてないやつ、どっちがよいんだいと言ったら、それは付いているやつの方がよいよね。手が込んでいて出来もよいように見えるからそっちがいいよね。そうすると無紋の方はどうだい、松本では「おぞい」という言い方をしますが、下伊那で使うかな、「おぞい」って。あまりよくないって言わないかな。あれ、松本の方言ですかね、間違いなく松本では使います。あまりよくないって言うね。

それで同じ遺跡からよいのも「おぞい」のも出て来るんで、だから村の中によい耳飾りをつける人たちと、よくない耳飾りと言うかぼろい、ぼろいっていう意味ともニュアンスがちょっと違うんですが、悪い、悪^{あく}って言う意味ではもちろんなくてね。粗品っていう粗ね、粗末な、まあ粗末だな、ちょっと違うかな。まあ粗末な耳飾りとそうではないのとあるから、粗末な方は例えば家柄がよろしくないような人たち、よい耳飾りは家柄のよろしい人たち、が着けていて、家柄がよいのはその村生粋の人たちで、「おぞい」耳飾りを付けているのはよその村から転入してきた人で、そういうふうに村の構成がなってるんじゃないかってことを言ったっていうんです。

これはそんなことはないよって他の分野の人たちから否定されて、だめになっちゃうんです。ただ、それでは同じ遺跡でね、同じように耳飾りの中で文様のついているのといないのと、なんであるのか。エリ穴でいろいろ調べた結果、分かったんですが、特に環形の耳飾り、断面形は4種類くらいあるんです。これは時間差でもあり系統差でもあるんですが、4種類くらいあって、この環形の耳飾りには必ず、4種類ともすべて文様のついているのといないのとあるんです。

数はどうなっているか。破片で数えると大きな破片と小さな破片と対等に数えていいかという問題が出てきて、実際問題、数を数えるのはものすごく難しいんですが、感覚的にはどんなタイプの断面形でも文様のついているのといないのとほぼ半々ずつ、おそらく武陵地も同じに出ると思います。ということで、臼形もそうです。文様の付いているのといないのと半々です。なんで付いているのといないのと半々なの、という言葉の説明はできない。さっき春成先生が言った優位な人たちと劣位な人たちが着け分けたんだっていう説明がだめだってことにな

れば、そりゃあ優位な人たちと劣位な人たちが着け分けたのは駄目だったということになれば、その違いはどのように説明できるのか、と私は考えました。この先は私の考えです。

私の考えだから合っているか違っているかかなり怪しいですが。ピアスを着ける穴を、穴がなくては耳飾りは着きませんから。開いているかどうか、私も高校の教員をやりましたから、うちのクラスの生徒はピアス着けちゃって困ったな、やるな、やるなどはなかなか言えない時代になっちゃいまして、まあピアスは黙認に近かったなあ。なんだけれど、その開けた耳に、最初は小さい、本当に針で穴を開けるんですよ、お医者さんに行っちゃってもらわなきゃいけないのに、お医者さん行くにはお金がかかって嫌だっていう悪ガキは自分で開けちゃうんですよ。そんなことをしたらそこから黴菌が入って膿んじゃってえらいことになるぞって言っても、自分で開けるんですよ。お医者さんに行っちゃって開けて貰った子は開けたそこに何か別のやつを差し込んでいるんです。穴を開けたら穴は傷ですから、人間の身体は傷を塞ごうとするから元に戻っちゃうんです。元に戻らないようにそこに別の物を差し込んで、あれは何でできているのか、プラスチックでできているのか、それを差し込んで穴が塞がらないようにして、またお医者さんに行ってもうちちょっと穴を広げて貰って、もっとでかい穴になったらピアスにする。

さっきのマサイ族の少女のように耳朶の穴がうんとでかくなったら、あれはもうおそらく元へ戻らんだろう。さすがにあれが元へ戻ってことはないだろうと思うんですが、穴の直径は、おそらく微妙に変わるんじゃないかな。

人間の生身の身体ですから同じ直径のままですってしてくれるとは限らない、もしかしたら縮んでくるんじゃないかな、という気がするんですよ。そうすると自分の、折角作って持っているよいピアスも、耳の穴の直径をどんぴしゃりにしておかない限り着けられないんです。でかくなりすぎても小さくなりすぎても入らんですから、どんぴしゃりにするためには着けたいサイズと同じサイズの何か、もしくはピアスを時には耳に入れてやる、毎日入れてやらなくてもよいでしょう、一週間に一遍とかね。10日に一遍とか、入れて、耳の穴のサイズをキープするということをしなきゃいけないんじゃないかな。そうすると日常的に耳の穴のサイズをキープするために必要な、場合には無紋の、そして今日はハレの日だから、お祭りだからといってハレの衣装として耳飾りをつけることは絶対にしたはずですから、そしたらハレの時には家紋のついた耳飾りをつける。耳飾りが文様のあるのとないのと半々あるという説明にはなりますよね。

あくまでもこういう説明ができるというのであって、そうだったというわけじゃないです。それが考古学の弱いところだね。残念ながらどうやらうまい説明ができるかまではいけるんです。うまくいったなあとは思いますが、事実かどうかはタイムマシーンを誰か発明してくれないかな。どういう説明だったら一番納得がいく、納得がいく説明を選んで行こうよ、そういうことなのであります。

次に、誰が着ける1 直径の相違から。こういう研究をした人がいます。耳飾りは耳の穴にあった直径でなければ入らないわけですが、その直径を出してみた、耳朶に接するところでの直径を出してみた。そうしたらこんなグラフができた。関東から中部にかけての耳飾りをかなりたくさん集めて、ただ直径だけをひたすら計ったら、このあたりで棒グラフのまとまりができる。ここでもうひとつまとまりができる、本当かな。直径の小さい方から並んでいるんです。1センチ未満、2センチ未満、3センチ未満、ここでひとつまとまり、まとまりがもう一つ、かなり強引だな。この棒グラフで区分ができるか、なんかだらだらと繋がっているんじゃないという気がして仕方がないのですがね。ともかくこうやって、三つぐらいの区分ができるだろう、というふうに考えた人がいるんです。

宮尾亨さん、もうひとり金成南海子さんって方が書いた論文なんですけどね。よく調べてよく作ってある論文ですが、このグラフはそれほど説得的ではないな。これ見ても三つに区分なんか本当にできるかな。直径が小さい方、中くらいの方、大きい方というふうに分けられると主張されまして、小形品は無紋が主体で万遍なく出て

くる、どんな遺跡でも。中形品は有紋が増えて、中形品が出る遺跡には大量に耳飾りを出したりして、ということまでは分かったんです。これもはっきり言い切れないのだけれど、まあ一応、そういうふうにして。耳に穴を開けるんですからこれは只事ではないですよ。ということは誰でも勝手に穴を開けてよいわけじゃおそろくないだろう、親が止めろというだろう、今だって。というわけなんです。ただね、あの、民族例で言いますと、成人、今だったら成人式で二十歳になったらみんな成人ですけど、昔はそうじゃない。15歳くらいかな、元服だと言いますね。元服してよいのはどういう人だろう。まあ武士ですね。武士ではなくて農民だって一人前だと認めると思うんですけども。誰でも一人前だって、お前、立派になったなあ、一人前に仕事ができるようになったなあ、だからお前は一人前だぞと認めてもらわなければ、元服式はさせてくれないはずですよ、おそろく。民族例で言ってもね、さっきのマサイ族の話ではありませんけれども、マサイ族で一人前の男として認められたかったら、槍一本でライオン一頭を仕留めてこいと言うのは多分嘘、大げさな話だろうと思うんだけど、でもその村の人たちの間で、こいつはこれだけできるようになったんだから一人前として認めようじゃないか、認められて初めて穴が開けられるというのかな。

あるいは別の言い方、人間の身体に穴を開けたりするようなことがらの中に、たとえば歯を抜くというのがあるんですよ。縄文時代の人骨の中で、意図的に歯が抜かれてる、生きてるうちに。抜歯って言いますが、そういう人骨が時期によっていっぱい出て来んです。これは成人式の一種の試験じゃないかと。歯を抜く痛みに耐えた者だけが一人前と認められる。

耳朶の穴も、耳朶に穴を開ける痛みを耐えた者だけが一人前と認められるというには、ちょっと耳朶の穴は、それほどではないよな。今は高校生だって開けちゃうんですからね、自分でね。ですが、一人前と認められない者がそこに穴を開けたなら、お前、やめろって村の人から圧力がかかるんじゃないでしょうか。

ということで、一人前と見做されたら初めて小さい耳飾りがつけられるような穴を開けてよくなる。それはどこの遺跡でも広くいっぱい出て来るから、これは一人前になった証拠のようなものだ。サイズの小さい耳飾りを着けてよいようになるのは、成人式の証拠なんじゃないか。それで次は多分、結婚。大人になったと認められてやっと初めて相手を探すわけですが、相手を探して結婚、みんなが認めてよかったねと言われるような結婚が出来た者は中形の耳飾りを着けられるようになる。小形の耳飾りの穴をもうちょっと大きくすることはできますから、だから中形にすることはできてその中形は、特に結婚すればいろいろとお付き合いの範囲も深くなるはずですから、家紋をつけた耳飾りを着けるようになりがちなんじゃないかというふうに、こういうふうに読めるんじゃないのと、これが直径の相違から見た通過儀礼説です。青春の儀礼とか一人前になって婚姻できる資格を得た儀礼だ、そういう社会の様相が読めるんじゃない？

誰が着ける、3番目です。これはちょっとパスです。これはいいことを言ってるんだけど、ちょっとパス。もう時間がなくなった。

9番、ごめんなさい。誰が着ける3 特定の系統の分析から。埼玉県の大宮台地と呼ばれるエリアがあります。大宮か浦和からそれより西側っていうことになります。高崎線より西側っていう、台地があるんですけどね。それで大宮台地にたくさん出て来るんで、大宮台地型と言われてまして、その大宮台地型の耳飾りは、非常に装飾に富んでいます。それがどこからたくさん出るかというと。これが地図なんです。これが茨城県、これは鹿島灘、これ房総半島、これ東京湾、これ駄目だ、今、いろいろ言ったけれどレーザーポイントで言ってなかった。) これ東京湾、これ相模湾、これ伊豆半島、で、この辺が神奈川でこの辺が東京でここが埼玉で、大宮台地ってこの辺です。大宮台地から離れるほど、その大宮台地型が出てくる、黒いドットで落としたところですが、出る遺跡の数が少なくなる。個体数も減ってきます。だからこいつらは大宮台地を中心とした人たちが、ある一族たちが作って着けていた耳飾りではないか。

ということで、これが長野県からも出てきて、武陵地遺跡からも1点だけ出ています。ですので、これはここ

の人たちが、大宮の人たちが来たかな、大宮台地周辺の人たちが来たかな、来るということは遊びに来た、まあ耳飾りを持って遊びには来ないだろうな。うーん、そうすると御嫁入りかな、ということなんです、婚姻圏。遠ければ遠いほど、婚姻の確率は下がるはず。大宮台地から離れれば離れるほど、大宮台地出身者が嫁に行く確率は下がってきますから、遠くに行けば出てくる確率が減るのは当然のことなんです。で、これは婚姻圏を反映するんじゃないのかな。大宮台地型というのがあれば、中部高地型、松本盆地型、あるいは下伊那型というのが耳飾りの中で捕まえることができる、どこへ行っているのかっていうのが分かれば、その通り。その通りなんです、それでは下伊那型というのはどうですか、松本型というのはあるんですか、そこが全然まだ出来ていないんですね。だから大宮台地型というのは分かりやすい型なので、こんなことが言えるんですが、ほかも同じことが言えるかどうかの検証がまだ全然出来ない、そこが弱いところなんです。

これは通交圏、婚姻圏の反映を期待できる、耳飾りは。そこまではいい。

というようなわけで、社会を深読みしていく可能性は十分ある素材なのです。それがちゃんと出来ているかというと、緒に就いたばかりでまだそこまで、と。

では10番目です。耳飾りはなぜ着ける、なぜ着けるっていったっておしゃれだ、だけどさっきから話しているように耳穴に穴を開けるのはおしゃれかい？、成人として認められた証拠だということになればおしゃれでは済まされないから。もうちょっと別な意味を付け加えなくてはならない。なんらかのステータスの表示ではないかということは昔から言われてます。たとえば一人前になった証拠。それはそうだね。もうすでにその例は話を申上げましたが、あるいは、図柄によりけりなんです、その着けている人が、どの一族出身なのかを表示するというステータスの表現なんじゃないかと。あるいは、昔は耳飾りは特殊な人だけが着けたって言っていた時期があって、呪術者のような、首長のような特別な人たちだけが着けていたから、それを表示するのが耳飾りじゃないかと言われていたこともあることもあったんですが。けどどうも、図柄が特別だったら、それは特殊な呪術者の耳飾りかもしれないですけども、そういう、あの人は特殊な人だ、あの人は何一族だ、というようなことは、その地域に住んでいる人は誰でも知っているんですよ。

おらほの村の住人、あるいは隣村の住人、武陵地の人からすれば中村中平の住民なんてみんな顔見知りのはず。それぞれの村にせいぜい20人か30人くらいしか人が住んでないんです。下伊那全体だって100人いるか200人か、200人かそこらはいたんだろうけれども。ちょっと計算してみたこともあるんですが、200～300人がいいとこかな。松本はもっと少ないかもしれない。そういう中ではお互いにみんな面識があるんですよ。あいつはどこの誰だ、父親は誰だ、こないだ何やったぞって日々の噂話は、村の中で、今みたいにいろいろな情報が入るわけではないですから。どんな話をする？朝から晩まで。誰かの噂話に決まっているじゃないですか。

そうしたら、どこそこの誰の情報なんてみんな知ってるよ。どこそこの誰は何一族の誰なんてみんな知ってるよ、もっともっと詳しく知ってるよ。ならばなんで、おらほの一族なんて、みんな知ってることをあえて表示するんだ。私、そういうことじゃないかと思えます。それを敢えて耳に穴を開けて嵌めこんで見せるという、なんでわざわざみんな知っていることを敢えて表示するんだ、大事なところはそこではないかと思うんです。そういう一面が弱いんです。

それをもうちょっと突っ込んで考えることがよいんじゃないのかな。ですが、ひとつ考えられるのは、みんな知っている者同士の集まりならば、そんなもの着けなくても分かるけれど、知らない人が混ざったら、大きなお祭りかなんかやる、関東からも人が集まる、関東の人までさすがに知らないだろう、武陵地の人。そうするとよそから来た人には示す必要がある。よそから来る人が大勢集まるような機会がもし設定されたとしたら、あえて示す必要がある、示す価値があるものではないかな、そういう考え方に至ったらどうでしょうか。

それから魔除けだっていう説、御守みたいなもの、悪霊が耳を通じて身体に入ってくるのを防いでもらうんだ

ということをする人もいまして、それはそれで何となく分かるんです。だからさっき言ったように、たまにつけて耳朶の穴を確保するっていう、これはなんなのかな。魔除けのためにするのならば、時折していてもよいわけですね。ちょっと今日は日が悪いから、ちょっと危ないところへ行くから、あの上にはどっかのお墓がある。そこはやたらに行くと祟る、というような時には着けていくわけです。耳の穴のサイズを確保することに加えて、悪霊から身を守るために着けていくということはありうるのかなという気はするんです。日常、着けていても悪くはないのかな。だけど家紋の着いた耳飾りは多分、日常じゃない。俺はこの家だ、家柄なんだ、というのをあえて見せつけたい時に、その文様がついているのがあるのかな、ということの説明だったら何となく説明がつくんじゃないかなという気がします。

それで話のおしまいに近いことになるんですが、たくさん出ている武陵地みたいな遺跡について見ると、あっ、ここで作ったんだねとすぐ言うんです。たくさん出る理由はなんだ、という話です。そういうことはあり得るんですが、作った痕跡がないんです。耳飾りを山ほど出したエリ穴遺跡も作った痕跡がないんです。どういうことが分かったらここで作ったんだということが分かるかと言うと、作り損ない、出来損ない、失敗作でもあれば、それはそこで作ったんだろうねと言えるんですが、そういうのはない、出てない。あるいは作る時に出了り屑、カスみたいなもの。石器は作る時に出了り屑が飛び散るわけです。それがたくさん出てくれば、ここで石器を作ったねと分かるんです。ところが耳飾りもね、石で作るわけではない、粘土で作るんですから、焼く前にやっぱり失敗した、これは駄目だといったら、水にもう一度ドボンと戻して、粘土に戻してしまえば再利用できるんですよ。そうすると駄目だから捨てるということはないんですね。耳飾りは。別の耳飾りの材料になっちゃうんです。

そういうことからすると、削りかすのようなものが出てくる可能性は極めて低いということになるんですね。というわけで作った遺跡は分からないんです。たくさん出たということは、そこで作っている可能性は十分あるんですね。多分、作ってんじゃないかと思います。痕跡はおそらく残らないから、これは答えようがない。

だけどそれよりも、さっきエリ穴の話をしました、エリ穴は土器と一緒に捨てられた。もちろんさっき話したとおり、廃棄のための魂抜の儀礼はするんですよ。霊は抜くんですよ。捨てていいってことになったら土器と一緒に捨てた。そういうことでどうなのか。武陵地に何軒の家があって、何人の人が住んでいたか正確なことは分かりませんが、20人か30人、ということで300年の間に500個体、でも500じゃ済まないでしょうね、全部、出ているわけではないですから。もっとたくさんあったでしょうね。ということになると遺跡としてはやたらと多いね。そうじゃない遺跡、七つしか出ない、十しか出ないという遺跡もいっぱいあるわけです。武陵地のように500だなんてのは身の丈を越えているわけですから、ということはその村の人たち、武陵地村の人たちが最終的に要らなくなったから捨てた、というにはちょっと多すぎるんですね。少ない遺跡も多いのに、武陵地だけなんでこんなに多いんだい。中平もそうだから、武陵地と中平だけなんでこんなに多いんだい。

この説明はどうやったら出来るんだろうね。それを考えれば、武陵地に住んでる人だけじゃない、他に住んでる人もやってきて、そこでなんらかの耳飾りをつけるような、耳飾りを着けるのが必要なような何かをやって、最終的にこれを自分の村に持って帰る、持って帰るのは嫌だ、やめた、でお祭りをやった場所に霊抜きをして置いておこう、だから沢山で。それでどうかな、と言ったら、何となく説明になりそうな気がします。エリ穴遺跡の報告書の中では、私はそういうふうに書きました。エリ穴はそういう性格なんじゃないかな。中平も武陵地もエリ穴ほどではないかもしれないが、よその人まで来てそこで使って捨てた遺跡なんじゃないかな。

では耳飾りだけ、最終的になんで捨てるようになるのかな、装身具なんだから。壊れれば捨てるでしょう。私の耳飾りなんだから私が死んだら多分、捨てるわな。親から子へ譲り渡すことはないことはない、ありうるだろうな。でも要らないって子どもが言え、譲り受けなくて捨てるってことはあるだろうな。ということで壊れる、あるいは所有者が死ぬってことはどの村でも起こりうるわけですから、耳飾りがちょっとしか出ない遺跡はその村に住んでいる人が死んだり壊したりして使わなくなって、だから捨てたんだという説明が出来るんです。

大量に出る遺跡の時には、よそからも着ける、あるいは着けた人がやってきて、そこで使って捨てる、という大勢の人寄りがあるような集落だからたくさん捨てられる。たくさん出る遺跡と少ししか出ない遺跡との説明はこれで行くのではないかなと思っているわけなんです。

ということは武陵地は人がたくさん集まる、そういう種類の遺跡だった、武陵地の持つ意味の大きさというのはそこにあるのではないかな。中核遺跡です、おそらく下伊那地域の本当の中核になるような遺跡だろうと。

耳飾りはそんなわけで晩期の前葉まで、後期の末葉からの300年間。それで晩期の中葉には消えてなくなります。晩期の前葉の終わりごろの耳飾りは、作り方が下手くそで、小さくて図柄は雑です。ていねいに作らなくなるんです。もう、耳飾りを作るの嫌になったな、というような耳飾りが最後です。で、そのあと、なくなります。もっと使い続けたかったんじゃないんです。もういいよ、もうやだよ、あるいはもう飽きたのかももうそんなものをやるのは時代に合わない。縄文時代にとっても時代に合わない、縄文人にとっても。ということになるのかもしれない。で、晩期の中葉になくなる。関東では晩期の中葉まで残るそうです。で北に行けば行くほど耳飾りが遅くまで残るようです。弥生時代には耳飾りそのものは継承されません。弥生時代の耳飾りはありません。古墳時代になって、金属製の耳飾りが、古墳に葬られるような階層の人たちにだけ普及します。これが耳飾りの大量に使われるピークの一つです。そして今現在、ピアスって格好でまた復活しているわけですけど。

以上で耳飾りの話を終わりにして、時間がちょっとオーバー致しました。ごめんなさい。土偶の話はどうしよう、写真だけお見せいたしましょうか。折角、写真は撮ったんで。

土偶です。これは耳飾りの時代より古いです。土偶の顔です。小さいですよ、これ。これは土偶の上半身です。これはおっぱいです。これ腕です。ここに頭があったはずですが欠けてなくなっています。後期前葉の土偶です。

これも後期前葉の土偶の胴体です。多分、背中側だと思います。これも土偶です。分銅の格好をしていますから分銅形土偶と言います。西日本の土偶です。東海より西にあります。で、長野県には少し入ってきます。一番北は飯山、山梨県でも一例あります。飯山にも二例あります。武陵地にはこの仲間が五つもあります。中平にはゼロです。

これはちょっと面白いですね。で、これは目かな、口かな。手足はないな。これも分銅型です。これは眉と鼻です。で、これ、東日本の土偶の顔面表現です。東日本の土偶の顔面を、分銅形と言う西日本の土偶の形にとっつけたっていう合いの子です。東と西の合いの子。これは頭です。東日本の山形土偶って言われているやつです。後期の後葉の土偶です。まだ耳飾りは出てこない。



頭だけ、胴体はあるんですよ、あるけれど欠けていて出てこない。これも頭だけ、顔だけ、これも山形土偶と言われる後期後葉の土偶です。これもここに眉があって、鼻がここにある。それが落っちゃったんです。削れて取れちゃったんです。次にこれ、これも同じような山形土偶っていうやつです。これもそうです。みんな頭です。顔の部分ですね。それで山形土偶ってやつは胴体です。ここにおへそみたいなのがあって、ここに出っ張りがあるって、瘤が取っつけられていて。ここに出っ張りがあるって瘤がつけられていて、これおっぱい、ここに何だろうってあるんですが、多分、お腹の大きい表現だろう、それを瘤をつけるっていうか、この表現にしているんだと思います。土偶の足です。山形土偶の足です。これは右足です。胴体です。山形土偶の胴体です。本当？っていうんですがね。これはこっち側が半分欠けているんです。右半身でこれがおっぱいです。おっぱいはこんなに長いんですよ。こんなに長いのがあったっていうんですが、あるんです。ここに首で、ここに足が来るはずで、

欠けてなくなっていますけれど。

同じように足です。足なんですけど、これ、横っちょにします。今の土偶を横から見たんです。足、踵、これは胴体の方です。で、ここ、剥げたところ、ということはこっち側にもう片側があるんですよ。これは右足ですから、こっち側に左足があるはずなんです。その左足が剥げて落ちちゃった。右半身を作って、左半身を作って、くっつけるんです。そういう作り方をしています。しかもここに穴が開いている。これ、ずっと上まで貫通して口に行きます。まるで胃と腸と消化器を表すように。消化器を表すような表現と言うのは、土偶のかなり早い時期からぽつぽつとあるみたいですが、この後期の後葉以降のこの地域の土偶にはうんと出てきます。左右分割でくっつけるという作り方もこの地域独自です。松本のエリ穴でたくさん見つかりましたが、武陵地にもいっぱいありまして、端からこれでしたから、これが甲信地域の、山梨でも見ましたんで。関東へ行くとこういうやり方はしない。似たような土偶を作っている、作り方が違う。というわけでこれが中部高地流の作り方だということなんです。

これは晩期の土偶の足です。

以上、終わった。すみません。時間を10分も超過してしまいました。以上ですが、武陵地の持つ意味を少しよくご理解いただければありがたいと思います。この遺跡はとてもよい遺跡ですので、ぜひ大事にしていきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

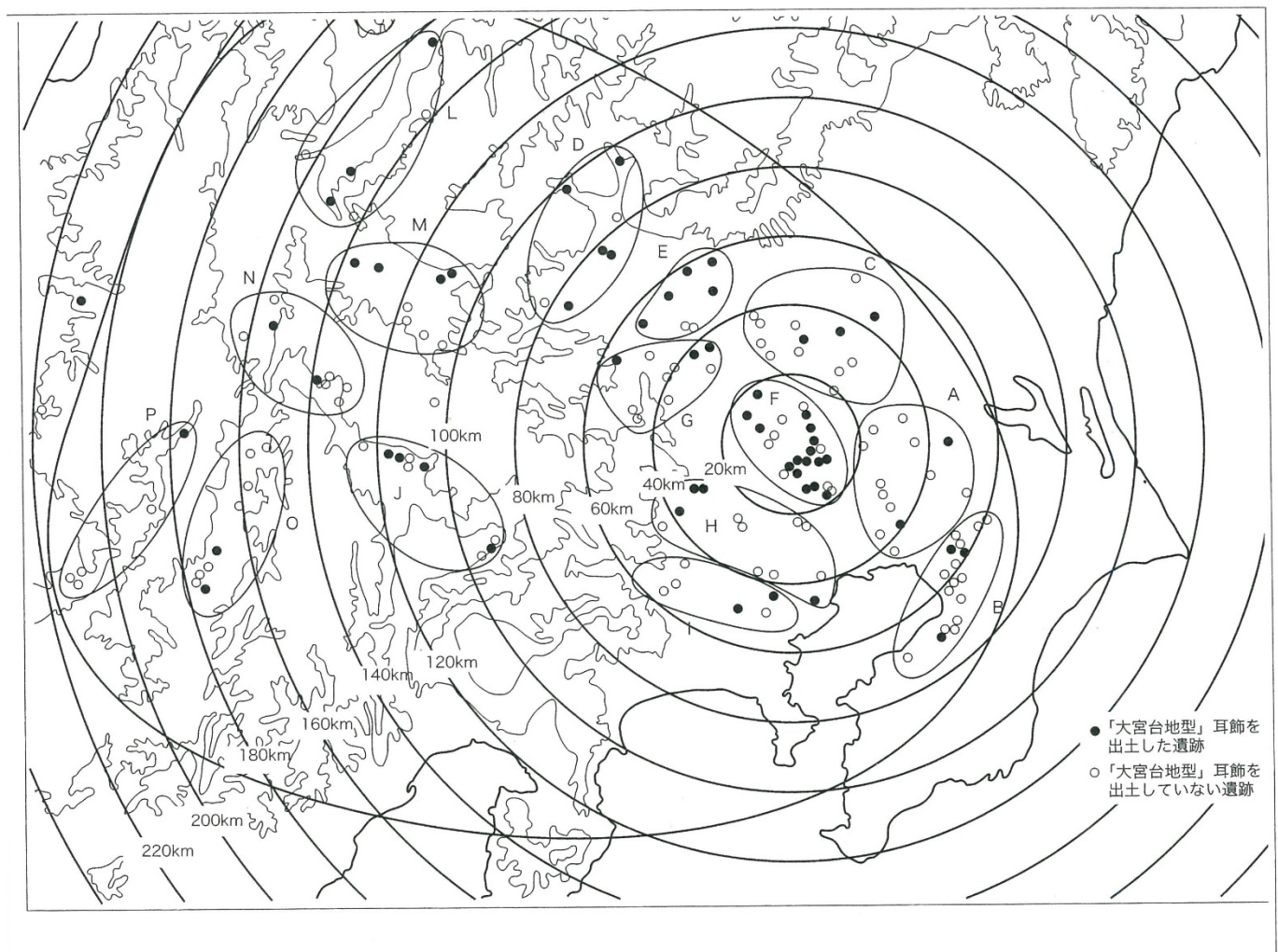


図5 「大宮台地型」耳飾出土遺跡分布図